

---

# 別れ話

常盤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

別れ話

### 【Nコード】

N9847L

### 【作者名】

常盤

### 【あらすじ】

ケイとモエの別れ話。

草食男と一歩間違うとだめんずウォーカーになりそうな女の子って  
気がします^^;

## （前書き）

長編の作成が煮詰まっているので、ちょっと書いてみたものです。

「別れたいの」

テーブルに向かい合わせに座り、モエはケイにそう切り出した。

「なんで？」

突拍子も無い話にケイは耳を疑った。

モエとケイは付き合って1年になる。

喧嘩も言い争いもした事はなく、モエはケイにいつも優しい眼差しを向けてくれていた。

そもそも、男女問わず多いケイの友達の一人だったモエが告白する形で始まった関係だった。

ケイは、モエを束縛しない。

モエも、ケイを束縛しない。

それでも、お互い大切に想いあっていると信じていた。

先日会った時も様子は変わらなかった筈なのに、別れ話とはどういうことだろう。

ケイは思い当たることを考えたが全く思いつかない。

「冗談…」

「私ってそんな冗談が言えるタイプじゃないから。」

モエは笑った。

その通りだ。

モエは、こんな話を冗談で言うタイプではない。

真面目で、慎重で、少しお調子者のケイをなだめながらも優しく見守っている感じだった。

でも、それは今、ケイにとっては慰めにもなりはしない。  
慎重なモエが別れたいと言い出したと言う事は、じっくり考えた結論なのだろう。

「どうして…」

「ゴメンね、私から好きだって言っておいてケイは納得できないかもしれないけど、1年付き合ってた結論はこれしかなかったの。」

じゃあ、とモエは立ち上がる。

引きとめようとケイは手を伸ばすが、モエは少し身体を引いて届かないように避けた。

「ありがとう、私の告白に答えてくれて。1年、楽しかったわ。」

モエはいつもどおりの優しい微笑みを残して、部屋を出て行った。

残されたケイは呆然とした。

なにがあっただろう。

ケイはふと思いつき、携帯を取り出す。

アドレスから、モエと仲が良かったと思われる人物を思い出して、電話を掛ける。

「ケイ？どうしたの。電話なんて珍しい」

モエが別れ話をしてきた、訳がわからないと言うと、電話の向こうで溜息が聞こえた。

「ねえ、本当にわからないの？」

「ああ…」

「…わからないから、振られたの。モエはあんたを恨んでも憎んで

も居ないし、ついでにそのうち疑うだろうから言っておくけど、新しい男も居ないよ。」

「じゃあ、なんで」

「モエは、自分を責めてた。私はケイを詰ってもイイって散々言っただのに。自分が好きになっただのはそのままのケイだからって、それを受け入れられない自分が悪いって言い続けてた。でも、私、モエは心の広い、とてもイイ子だと思う。なのにケイを丸ごと受け入れられないのは自分の心が狭いからだって…」

電話口から聞こえる声にケイは更に愕然とした。

感情を抑えるように暫く間があって、再び語りだした。

「細かい事を言い出したらキリがないから。ねえ、ケイ。あんたはモエを何だと思ってたの？」

そう言っただけで電話が切れた。

なんだかわからない。

モエは、ケイの事が好きだった。

ケイを受け入れられないとはどういうことだろう。

モエが充分自分を受け入れてくれていたのではないのだろうか？

ケイ自身はモエに不満を抱いた事など無いのに。

ケイは、別の友人に電話を掛けた。

モエと先の電話の人物とも仲が良いはずの男友達だ。

いきさつを話すと、ふん、と気のない声が聞こえた。

「んで、ケイはどうしたいわけ？」

どう、と聞かれても困る。

「モエと別れたくないと思ってんの？」

「そりゃ…」

そうだ、と言おうとするとそれに被せるように言われた。

「じゃあ、なんで今追いかけないの？」

「…」

「ケイさあ、モエちゃんに好かれた事に喜んでたけど、モエちゃんに執着してないよね？追いかけたいほど好きじゃないよね？」

「そんな事…」

ケイはモエの事が好きだ。

でも執着という意味がわからない。

ケイは、人にも物にも執着しない。

そういう性格なのだ。

「ケイは、モエちゃんが居なくても平気。それにモエちゃんは気付いた。それだけの事だよ。」

わからなかった。

モエは、ケイが居なくても平気なのだろうか？

ケイの事が好きだと言って恥ずかしそうに笑ったモエは、ケイが居なくても平気なのだろうか。

別の友人に電話をした。

彼は「へえ」と言った。

「モエちゃんが、お前をととう見限ったわけか。残念だったな、ケイ。あんな心の広い子はなかなか居ないだろうに。」

モエを知っている友人に次々と電話をした。

「ああ、そう。よく1年もったよね。モエは、ケイの事を良く見て理解してたから。」

「モエちゃん、痛々しかったから。最後は笑ってた？良かったね。」

「一言も責められなかった？それはモエ最後までケイの事を想ってたんだね」

掛ける相手掛ける相手ほとんどに、モエはケイを想っていて、頑張っていたといわれた。

モエはケイの悪口や不満を言った事はなく、ケイの為に心を砕いていたと。

ただ、一人の友人に言われた。

「モエは、ケイの事を想いすぎて、自分の心を砕いてしまったの。もうモエを離してあげて？」

どうせ、追いかける気はないのだろうから。といわれた。

追いかけるべきなのだろうか。

別の友人に聞いてみた。

「追いかけるか追いかけないかはケイの心の問題だけど、そんな事を俺に聞いている時点でお前にモエを追う資格はないよ。」

甘えるなよ、そういわれた。

---

それから、モエには会うことも無く。

避けられているのか、学校の中でも会う事は無かった。

モエと共通の友人達は、それ以来口を噤み、何も言わなかった。



数年が経ち、ケイも友人達も社会へ出て働き始めた。それぞれにいろんな事情があり、疎遠になり、ケイは新たな友人関係を作り上げて行った。

社会人になれば色々な確執もあるが、それなりにやってきていた。ある日、ケイは仕事の関係でアメリカへ渡った。

そこで、目の前に現れたのはモエだった。

取引をする予定の会社で秘書を務めていると挨拶をした。

ケイは動揺を抑え、名刺を交換した。

モエは全く表情を変えず、優雅で丁寧で、淀みの無いビジネスウーマン然とした微笑で対応した。

相手企業の社長と流暢な英語で会話をしているモエは昔とは全く違う女性に見えた。

ケイは、声を掛ける事も出来ず、モエもケイに個人的に話しかけることも無かった。

モエは、昔より綺麗になっていた。

帰国し、慌てて、昔の友人の携帯番号を探す。

もう使えない番号もいくつかあったが、モエと仲の良かった女性に繋がった。

「へえ、モエに会ったんだ。かつこいい女になってたでしょ？」

そういつて笑った。

「ケイと別れた後、すぐに留学したの。私達は口止めされてたんだけど、そんな必要なかったわね。ケイは一度も私達にモエの居所を聞かなかった。だから私達は納得したのモエの判断は間違ってたんだってね」

もう、随分昔の話になるものね、と言って彼女は当時には言わなかったいろいろな事を教えてくれた。

「モエは、ケイの八方美人的な部分も好きで、でも自分の思いだけが大きい事に苦しんでた。ケイは友達優先で、モエのことは常に2番目以下。それも、モエは許容しようとしてた。でも、ケイにはちゃんと遠まわしに伝えていたはずよ。でも、いつもケイはモエの話を半分も聞いてなかった。ほとんど聞き流したんじゃない？」

言われてみれば思い当たる。

モエは自分を好きだから、このくらいは許されると思って甘えていた。

それがモエの中でどんどん失望に変わって言ったんだと、今は理解<sup>わか</sup>る。

「あの時はモエがかわいそうだった。でも、この前モエと話をしたの。彼女、言ってた。あの頃は皆子供だったんだって。モエもケイが初めて付き合った相手に、必死だったからバランスがわからなかったんだって。モエは、そういうながらもあの時に気付いていたんだと思う。ケイが自分の好意に甘えていて、自分は甘えられる事に依存しているんだって。このままじゃあモエもケイも一人で立って歩けないから、全部リセットしたかった、ケイには悪いことをしたのかもしれないけど、後悔はしていないって言ってたわ。」

で、どうだった？と聞かれ、素直に思ったままにケイは答えた。

「綺麗だった。かつこよかった。あんなモエが居たなんて知らなかった。俺にとつては優しいモエだったけど、モエはあんな強いところもあつたんだな。確かに俺はモエの好意に胡坐をかいて甘えていたんだよ。」

あの時追いかければよかったと笑うと、そんな気無かったくせにと電話の向こうでも笑い声が聞こえた。

「ケイもちよつと変わったよね。モエには敵わないだろうけど」  
「そうだな、もう少しモエに惜しんでもらえるように頑張るよ」

笑いながら「がんばれ〜」と言われ、その内、当時の皆で飲もうと話して電話を切った。

ケイは、アメリカで見たモエの面影を脳裏に描いた。  
フワリと微笑む顔は昔の面影を残し、仕事の話には厳しく真面目な眼をし、周囲からとても信頼され、それに応えるモエは、ケイの遥か上を歩いて行っているように見えたと、実際そうだろう。

眼を閉じ、過去のモエに「無神経で鈍感な男でゴメン」と謝る。

ケイは、あの時の思いが心の中で完全に消えるのを感じた。

どこかで、モエはいつまでも自分を好きで、戻ってきてくれるかもしれないと思っていた。

でも、今のケイにモエが戻る事は無いと解った。

今の綺麗なモエの横顔を思い浮かべ、心で話しかける。

「さよなら、ありがとう」と・・・。

（後書き）

実際の別れ話は、感情的になりがちですがそういう部分をザックリ省いて、冷静な別れ話を描いてみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9847/>

---

別れ話

2011年1月4日02時55分発行